

続  
とちぎの  
サムライ  
vol.25

全国津々浦々  
お城めぐりの旅

男の城  
天下を取らせた  
木下藤吉郎に

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わることになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところをご容赦願います。  
(一社)宇都宮建設業協会 木澤喜人

歴史好きの方は、たくさんの逸話をご存じだと思いますが、そこには書きれないほどの城が背景にあり、悲喜こもごもの営みが結構面白いものです(私だけでしょうか?)。戦国時代に天才軍師として当時の木下藤吉郎を合戦のたび勝利に導き、大出世させたのが竹中半兵衛でした。竹中氏は、美濃守護の土岐氏の家臣でしたが、土岐氏が没落すると、代わって台頭してきた斎藤氏に仕えます。半兵衛が19歳の時、父の死により家督を相続し「菩提山城」の城主となりました。半兵衛は斎藤道三の孫の斎藤龍興に仕えましたが龍興は政務に無関心なばかりか愚行を繰り返す、忠臣の諫言も聞かず、要となる家臣を遠ざけていました。半兵衛は城主龍興の愚行を戒めるため稲葉山城乗っ取り事件を実行しました。



永禄7(1564)年2月、半兵衛は稲葉山城に人質に出していた弟・久作の病氣見舞いと称して家臣16名を率いて登城し、城外に待機していた舅の安藤守就の軍勢とともに、慢心し油断していた龍興を城から追い出してしまいました。半年ほど過ぎて半兵衛は、自ら龍興に詫言を入れて城を返

したのですが、結局龍興はこの切れ者の半兵衛を放り出してしまいました。そこで半兵衛は、菩提山城を出て、近江の浅井長政の客分となり、1年後に旧領に戻りました。その後、織田信長は斎藤氏を滅ぼし、稲葉山城を岐阜城に改めました。そのうち半兵衛の優れた才能の噂を知った信長は、自分への士官を呼びかけましたが、半兵衛は信長には仕える気はなく木下藤吉郎には好意を持ったので、与力として謀臣となりました。



半兵衛が乗った稲葉山城(後の岐阜城)。  
籠からの比高は320mほどあり難攻不落の城です。

元亀元(1570)年4月、織田信長は突如朝倉攻めを敢行しました。朝倉の支城を落城させ、さらに進撃を続けようとしていた矢先、浅井長政の裏切りが分かりました。織田軍は浅井の領国である近江を経由して越前に進軍してきているので、浅井に背かれたら退路を断たれてしまいます。

そこで信長はあっさりと退却を決意しました。しかし、退却する際には朝倉軍が必ず追撃をしてくるであろうことは当然考えられます。その時、自ら危険な殿(しんがり)を買って出たのが木下藤吉郎でした。与力となった半兵衛と綿密な作戦を立て、藤吉郎は織田軍の退却を無事見届けた後、悪戦苦闘しながらも退却に成功しました。低い身分から出世していった藤吉郎は、他の老臣・旧臣たちからみれば卑しく軽んじられる対象でありました。半兵衛は藤吉郎の織田家での足場を高めさせるため、命を賭してしんがりを引き受けさせ成功に導いたのでした。この功績により、織田家中で彼を侮る者はいなくなりました。その後、義弟の長政に裏切られた信長は、浅井・朝倉家を討伐すべく態勢を立て直します。そして勃発したのが織田・徳川連合軍3万と浅井・朝倉連合軍2万5千とが激突した姉川の合戦でした。もともと半兵衛の居城である菩提山城は美濃・近江国境に近い所であったので地元にいるいろいろな人脈を持っていました。姉川の戦いに先立って半兵衛はすでに、近江の浅井長政の重臣である鎌刃城主堀次郎・樋口三郎兵衛を調略してしまっていたのです。文字どおり戦わずに味方にしてしまうという切り崩し工作によって、浅井氏を滅亡に追いこんでいき、この姉川の戦いは織田軍が勝利しました。

この功績は大きく、軍師としての半兵衛の力量が世に知れわたりました。織田軍はすぐには小谷城を攻めず、横山城を築き様子を窺っていましたが、天正元(1573)年8月に小谷城攻略を開始しました。小谷城に援軍で籠っていた朝倉勢は織田軍の攻撃により越前に退却、織田軍はそれを追撃し、ついに越前まで侵攻。朝倉義景は自刃して朝倉氏は滅びました。それで完全に孤立してしまった小谷城は、木下藤吉郎秀吉らの軍勢に攻められついに落城、浅井長政は自刃しました。この時も半兵衛は、小丸の浅井久政(長政の父)と本丸の浅井長政を分断して攻撃する作戦を藤吉郎に進言し落城させました。また、半兵衛が浅井の家臣を調略できたことで、藤吉郎は浅井長政の妻で信長の妹であるお市の方と3人の娘を城から脱出させることができたのでした。



左から「姉川古戦場」。真ん中が「小谷城本丸跡」、  
右が「鎌刃城主堀次郎」。

中国征伐を計画した信長は、秀吉を司令官としました。秀吉が播磨に入ると、地元の黒田官兵衛がその先導役を務めることになりました。その後、半兵衛・官兵衛の2人は、秀吉の下で行動を共にするようになり、播磨攻撃で軍功をあげたのでした。翌6年、信長の有力な部将であった有岡城主荒木村重が、信長の人事・政策等に不信感を持ち離反すると、官兵衛は村重の説得のため有岡城へ使われました。説得するどころか官兵衛は捕縛された挙げ句、牢獄に幽閉されてしまいました。官兵衛との連絡が途絶えた信長は、彼が裏切ったと激怒し官兵衛の嫡男・松寿丸(後の福岡52万石初代藩主黒田長政)を殺せと秀吉に命じました。しかし、半兵衛は官兵衛を信用し、秀吉に松寿丸の処刑を自分にまかせてほしいと申し出、松寿丸を自領に引き取り、家臣の屋敷に隠しました。信長の首実検には「偽首」を差し出しその場をしのぎました。そして半兵衛は、胸の病気がかなり進行していたにもかかわらず、「武士の死に場所は戦場です」と無理を押しつけて秀吉の中国地方攻めに出陣しました。一時、京都で療養をしてはいたのですが、秀吉の補佐役として三木城の別所長治を攻めに参戦し、陣中で病没してしまいました。享年36歳。後に、荒木村重の有岡城が陥落し、やっと土牢から救出された官兵衛は、嫡男の命の恩人・半兵衛に感謝してもしきれないほどでした。軍師として秀吉を支えるという半兵衛の仕事は、子どもの命を救われた官兵衛に引き継がれ、天下統一へとつながっていきます。



菩提山城の籠にある竹中一族が居住した陣屋跡

比叡山延暦寺の焼き討ちの時にも、官兵衛は秀吉の将来に残虐な印象を与えてしまうのは得策ではないと考え、自己責任で事前に焼き討ちが始まるといううわさを流し、脱出の機会を作ってやるという命を懸けた行動を取ったのでした。僧兵は許さなかったのですが、百姓・女・子どもについては、配下の者に見なかったことにさせ、数百の命を救ったのでした。信長と明智光秀の残虐な行為は後世まで伝わりました。秀吉も参加はしましたがダークなイメージを持たれることはありませんでした。結局、半兵衛は秀吉の軍師であり、よき参謀であったのですが、秀吉が天下を取ったことも、また黒田官兵衛が無事に生還したことも、松寿丸を隠して官兵衛のもとに返せたことも知ることもなく亡くなったのでした。世の優れた才能を持った人は、往々にして短命なことが多いようです。何の取り柄もない小生は、だんだんボケることはあっても、冴えていくことは有り得なく、悔しくてもなるようにしかならないので、せめて精一杯長生きし平凡に暮らしてやる〜(冷汗)。動画は、YouTube「空中散歩 菩提山城」[https://youtu.be/9Y6MAMW-\\_M8](https://youtu.be/9Y6MAMW-_M8) にアップしています。

